

氏 名	ふちのうえ ひでき 淵ノ上 英 樹
学位の種類	博 士 (経 済 学)
学位記番号	経 博 第 181 号
学位授与の日付	平 成 16 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	経 済 学 研 究 科 組 織 経 営 分 析 専 攻
学位論文題目	アフガニスタン復興：アムダリアの経済政策

論文調査委員 (主 査) 教 授 塚 谷 恒 雄 教 授 溝 端 佐 登 史 助 教 授 坂 出 健

論 文 内 容 の 要 旨

「これまで培ってきた中央アジアに関する知識，経験，データを利用してアムダリア川対岸の国・アフガニスタンの復興支援策を提言し，その実現に向けての課題を明らかにする。」これが著者の主張であり，問題提起の出発である。

この問題提起に対しては，第3章で具体的な提言がなされる。またその提言を実現可能にする河川の流量データ，旧ソ連邦中央アジア諸国の灌漑の実情と問題も同章で報告されている。ここで報告されている1930年代からの流量データ，アムダリア右岸の灌漑計画は，世界で初めて報告されたものであり，著者の提唱する農業灌漑設備の計画にとって重要なデータとなっている。同時に，この地域全体の安定化に向けて水資源供給ひいては食糧供給という面で貴重なデータでもある。それは単にアフガニスタンにアムダリアの水資源を引きこむだけでなく，土中灌漑（SDI）など新しい灌漑方式を導入し，米作に力点を置いた新しい農業開発である。

第2章では，中央アジアの今日の経済，資源，環境，安全保障に関わる問題について報告がなされている。著者が実際に現地足を運び，市民の生活から汲み取った情報も含めて詳細に報告している。

第3章はアフガニスタン復興に向けたアムダリアの役割を述べた章である。従来ともすればアムダリアは，アラル海の枯渇という負の側面が強調されてきた。しかし大量の人口増大と工業開発の元となったアムダリアが1920年代から如何に精緻な計画をもって整備されてきたかの情報は皆無であった。本章で始めて明らかにされる水資源の利用の一端でも，これまでのアフガニスタンに適用されていたならば，ソ連進攻後とは別の側面が世界史に残ったに違いない。またさきのSDI利用の新しい農業開発は，砂漠地帯での水資源涵養と節約，ひいてはアムダリア沿岸一帯を豊かな穀倉地帯に変革することであろう。

第4章から第6章では，研究の対象地域であるアムダリア川流域を含んだキジルクム地域の自然，歴史，文化が，丁寧にレビューされている。ペンジケント，サマルカンド，ブハラ，ナボイなどの都市がなぜシルダリアやアムダリアを避け，その中央に位置するザラフシャン川を選択したのか。この河川周辺の特徴，水資源の都市国家建設への貢献，そして1950年以降の乱開発の歴史をレビューすることで，今後のアムダリア川開発の教訓とすべきであると著者は主張する。

こうした研究を通して，著者はアフガニスタン復興支援策として，アムダリア川左岸において，土中点滴灌漑による灌漑農業を提唱している。その際に考えられる課題として，5つの課題があると論じる。第1に，有効な国際河川の水資源利用に関する国際協調枠組みが必要である。第2に，アフガニスタンを含めた全ての沿岸国がこの枠組みに参加しなければならない。第3に水資源利用に関する紛争を仲裁するための独立国際司法機関が必要である。第4に，より信頼度の高い水資源配分を達成するために，正確で継続的な気象データの観測が必要である。第5に，アフガニスタン復興支援国際会議で集められた45億ドルのファンドを，アフガニスタン国内だけに投下するのではなく，アムダリア川沿岸国全てに対し投下しなければならない。沿岸国全ての農業の改善を同時的に進める必要性を説いている。この提案は国際社会ではじめてなされるものであって，今後幾多の困難が待ち受けているであろうが，傾聴に値する提言である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、アフガニスタン復興支援策に関して、水資源を中心に同地域、および近隣地域の特性を踏まえた観点から提言を行った画期的なものである。本博士請求論文以外、すべての業績は英語で書かれているため、日本よりは外国で注目を集めている。

著者は次のように主張する。「これまで培ってきた中央アジアに関する知識、経験、データを利用してアムダリア川左岸の国・アフガニスタンの復興支援策を提言し、その実現に向けての課題を明らかにする。」これが問題提起の出発である。この問題提起に対して、第3章で具体的な提言がなされている。またその提言を実現可能にする水資源の流量、水質データも同章で報告されている。

ここで報告されているデータは、世界で初めて報告されたものであり、著者の提唱する農業灌漑設備の計画にも役立つデータであるが、この地域の安定化に向けて貴重なデータでもある。それは、単にアムダリア水資源の自然的流量を記録したものではなく、砂漠地帯に大規模にはりめぐらされた灌漑網の働きを1920年以降できる限りの科学的見地から利用してきたからである。今その事を知るものは少なく、計画立案者は各国へ散らばってしまった。観測者の多くは生を終えている。ましてアフガニスタン復興と関連があると考えられるものは少ない。本論文は旧ソ連邦の灌漑技術と、イスラエルなどで発展してきた土中点滴灌漑（SDI）を組み合わせ、アフガニスタン復興に資するばかりか、アラル海復興の手立てとしても長いスパンで研究を行っている。

このことが欧米やアフガニスタン現地で淵ノ上論文が高い評価を受けている理由である。ようやく日本で、現地の科学技術と資源を利用した国際貢献の方策が芽生えたところに本論文の独自性がある。これは長年にわたって共同してきた現地の科学者集団が日本人研究者に対し少しずつ秘密のバールを脱ぎつつある証左である。また同時にアメリカ国務省、イスラエル、ウズベキスタン、タジキスタンなどは積極的に本研究に支援を申し出ており、すでに2002年度からは具体的共同研究が開始されている。またNATO出版部ではカラーのままの原稿を出版する予定である。

口頭試問で著者は、アダム・スミスの経済学の定義に言及し、「経済学とは、世界から貧困や飢餓を無くすための学問である」と主張した。現在、アフガニスタンで発生している危機的な状況を、経済学の原点に立って著者は分析し、その解決策を提言している点において評価すべきものである。しかし、同時にいくつかの改善点があることは、否めない。

すなわち、本論文の分析に精粗のむらが見受けられる点である。こういった地域の研究において、データや資料の出所について、全てを明確にできないということは理解できるが、引用については、そのソースについてできるだけ詳細に報告すべきであった。また、国際河川の水資源利用に関して、中央アジア5カ国のより包括的な分析がなされるべきである。しかし、これらは本論文が明らかに流量データや、中央アジアの具体的な特性を踏まえた復興支援策提言ということに比べれば、些細なものであり、その価値を損なうものではない。

よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお平成15年12月15日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。